



INTERVIEW
狩野倫久 監督
JAPAN NATIONAL TEAM

U-20日本女子代表は、FIFA U-20女子ワールドカップコロンビア2024を準優勝で終えた。狩野倫久監督に今大会を振り返ってもらった。

取材日：2024年10月3日

©2024 FIFA

総力を結集して挑んだ大会 個々に成長してくれた

——今大会のメンバー選考で重視されたことを教えてください。

狩野 2023年3月からAFC U-20女子アジアカップを含めて8回の活動を行い、49人の選手を招集してきました。今大会から出場チーム数が16から24に増え、決勝までの試合数が1試合増えたこともあって、複数ポジションでプレーできることとフィットネスレベルやメンタル面でのタフさをベースに21人を選びました。FIFA U-20女子ワールドカップはインターナショナルマッチウィークに該当していないため、招集には各チームの協力が不可欠でした。選手を送り出していただいたことに感謝しています。

——開催国のコロンビアは高地でした。準備で大切にされたことは何でしょうか。

狩野 大会を7試合戦い抜くには、心身のコンディションを整えることが一番のポイントになると思います。高地に順化するだけでなく、コンディションを上げながら初戦から思い切りプレーできるように、フィジカルコーチやメディカル

スタッフがしっかりと準備してくれました。

——初戦のニュージーランド戦は7-0、2戦目のガーナ戦は4-1と2連勝で早々にグループステージ突破を決めました。

狩野 さまざまな展開を想定していた中で2試合とも良い形で勝つことができました。自分たちの強みを認識しながら次の試合に向けて積み上げることができていたと思いますが、同時にそれが慢心にならないよう、3戦目やラウンド16に向けて選手たちの気を引き締めることもしていました。

——3戦目のオーストラリア戦は、土方麻椰選手の2得点で快勝しました。選手を複数入れ替えながら試合を戦う中でチームの戦いぶりをどうお感じになりましたか。

狩野 今大会は、メンバーをあまり変えずに戦うチームが多かったのですが、日本は「誰が出ても遜色がない」というアベレージの高さがチーム力につながったと思います。オーストラリアは、ヨーロッパ予選や今大会のグループステージの2試合では前からプレッシングをかけてスタイルでした。しかし、日本戦

は自陣に引き込み、最少失点か引き分けて勝ち点を得ようという意図がプレーに出ていました。そういう展開でも前線の土方選手に良い形で配球でき、彼女の得点がチームに勢いをもたらしました。

——ラウンド16のナイジェリア戦は序盤に硬さも見られましたが、松永未夢選手と土方選手のゴールで2-1と競り勝ちました。

狩野 ノックアウトステージは相手のシュートレンジが広くなり、パススピードも上がってスピードのある選手が増えます。それを想定し、われわれもさらにギアを上げるための準備をして臨みました。リスクマネジメントをしながら安定した守備で試合を優位に運べたと思っています。

——準々決勝は、優勝候補のスペインに主導権を握りながら20本以上のシュートを放ち、延長戦で競り勝ちました。何が勝利のポイントになったと思われませんか。

狩野 スペインが相手でも「自分たちがボールを保持する戦いができなければ、この大会でも、なでしこジャパン（日本女子代表）に行っても勝つことはできない」と選手には伝えてきました。選手たちはスペインに怖れることなく、前からプレッシングをかけてマイボールの時間を多くし、良い距離やタイミング

緻密さは日本の強み、プレッシャーの中でもそれを発揮できる力を

でのパス回しや動き出し、攻撃のテンポを発揮することができました。シュートを何本打っても決まらなような厳しいゲームはどちらに勝敗が転ぶか分かりません。それでも選手たちは自信を持ってプレーしていましたし、ベンチ入りしている選手を含めて全員がチームの力になれるように考えて行動していました。それが日本の強みですし、その結果が決勝ゴールという形につながりました。

——準決勝では地元のコロンビアを破って勝ち上がったオランダに対し、危なげない試合運びで2-0と完勝しました。チームの成長をどのように感じられましたか。

狩野 オランダの平均身長は172cmで日本とは10cmほどの差がありました。体格やスピードの違いに関しては、選手たちがそれまでの戦いの中で順応できていました。体を当てて相手のスピードを落とさせる、走らせない、簡単に蹴らせないなどのスキルは、さまざまなシチュエーションを通して個々に工夫し、発揮できていたと思います。

——決勝を戦った朝鮮民主主義人民共和国(DPR Korea)とは、AFC U-20女子アジアカップ決勝以来の対戦となりました。勝利には何が足りなかったのでしょうか。

狩野 立ち上がりには相手のプレスを受けてしまい、ロングボールによる展開も含めて押し込まれる展開が増えました。日本にはそこからでもボールを前方に配給し、相手陣内に入っていく力が足りなかったと思います。DPR Koreaは個々の基礎技術とフィットネスレベルのアベレージが高く、チームスタイルを徹底させることにも長けているので、その点は日本もさらに水準を上げていく必要があります。

——準優勝で終わった今大会を振り返って、どのような収穫と課題がありましたか。

狩野 選手選考においては、なでしこジャパンに入った選手やけが人も含めて、招集できなかった選手がいたことは事実です。その中でも、今回出場した選手たちが世界の舞台で活躍し、大会を通して成長する姿を見せてくれました。日本女子サッカー全体を底上げしてくれたという意味で、それぞれの成長は大きな収穫だったと思います。

——世界の強豪国と戦うために、これまで通り、フィジカル能力を上げていく必要がありますが、日本の一番の良さは、高い技術や判断力などの緻密さだと思います。DPR

Koreaのように強いプレッシャーをかけてくる相手に対して、しつかりとつないで前方に展開していけるくらい質を追求していくことが大切だと思います。

——大会を通じて、スタンドから日本に多くの声援が送られました。応援されるチームになった要因は何でしょうか？

狩野 ひたむきにプレーし、最後まで諦めずに全力で走る献身でしょうか。また、南米のサッカー大国であるコロンビアの人々が、ボールを保持して攻めるといふ日本のフットボールを好んでくれたことも応援していただけた要因だったのかなと思います。

——4大会連続6度目のフェアプレー賞を受賞したことについてはいかがですか。

狩野 選手たちの礼儀正しさと立ち居振る舞いを評価していただけた結果だと受け止めています。対戦相手や審判員、試合ができる環境、ファンやサポーター、運営に携わっている人々がいるからこそ、われわれはピッチに立っている。そのことを選手たちは理解しています。そうした意識は「代表チームだから」「生まれるものではなく、日常の姿勢の表れであり、そうした日本の指導が世界に評価された」ということだと思っています。

——最後に、日本女子サッカー界を支える全国の指導者と選手たちにメッセージをお願いします。

狩野 この年代は、U-18クラブチームや高校、大学、なでしこリーグやWEリーグ、また、海外でプレーしている選手もいます。その選手たちが、日常からしつかり準備をしてワールドカップの舞台に挑ん

——各国の育成年代の強化についてはどのようにご覧になっていますか。

狩野 日本はU-17とU-20の次になでしこジャパンがあります。欧州はU-15から20まで1歳刻みに代表チームがあって、その次にU-23、そしてトップ代表になります。年代ごとにネーションズリーグを行って欧州各国で強化をしていますので、日本はインターナショナルマッチウィークでも欧州勢とのマッチメイクが組みにくくなりました。そうした状況に鑑みても、今後は日本独自の強化策が必要になります。それを確立するまでは我慢の時期が必要でしょう。日本の強みである育成力を伸ばし、自分たちの良さを最大限に発揮するための策を議論し、追求していかなければなりません。

——最後に、日本女子サッカー界を支える全国の指導者と選手たちにメッセージをお願いします。



試合に出ている選手も出ていない選手も全員がチームのことを考えて行動していた。ワールドカップという舞台で大きな経験をし、それぞれが成長を遂げた（写真はオランダ戦後）

U-20日本女子代表、 2大会連続の準優勝



©2024 FIFA

FIFA U-20女子ワールドカップが8月31日〜9月22日、コロンビアで開催された。8度目の出場となったU-20日本女子代表はグループステージを全勝で突破し、ノックアウトステージも接戦を制して3大会連続の決勝に進出。決勝では朝鮮民主主義人民共和国(DPR Korea)に惜しくも敗れ、準優勝となった。

※U-20日本女子代表メンバーおよび公式記録は43〜45ページに掲載/所属は大会時

グループステージ

13得点1失点で全勝突破 一戦一戦成長を重ねる

日本サッカー協会(JFA)は8月14日、FIFA U-20女子ワールドカップに出場するU-20日本女子代表のメンバー21名を発表した。今年3月のAFC U-20女子アジアカップを戦ったメンバーを中心に選出した狩野倫久監督は大会に向けて「見る人の心を動かすようなフットボールをして優勝する」という目標を掲げた。戦いの舞台は、標高約2600mの高地ボゴタ。グループステージは中2日の連続となるため、準備のためにチームは約2週間前に現地に入り、選手個々の体調をモニターしながら高地順化を図るなど、段階的にコンディショニングを上げて大会初戦を迎えた。

9月2日にエル・テチヨスタジアムで行われたニュージーランドとの初戦は、日本が立ち上がりから相手を圧倒した。最前線で先発した土方麻椰(東京NB)が16分、松永未夢(東京NB)のクロスに合わせて口火を切ると、38分には小山史乃観(ユールゴードンF)のパスから土方が再びゴールネットを揺らす。41分には笹井一愛(N相模原)が得意のドリブルから3点目を決め、45分には中央突破から大山愛笑(早稲田大)のゴールで4-0。後半は小山、早間美空(S広島R)、笹井が得点し、7-0と大勝を飾った。

第2戦は先発メンバー4人を更し、ガーナと対戦。10番のSobrinhaがゴールをターゲットにクロスボールやロングボールを放り込んでくる相手に対し、守備では米田博美と白垣うの(共にC大阪)のセンターバック、攻撃では初先発の松窪真心(ノースカロライナ・カレッジ)を中心に日本は主導権を握った。そして、前半終了間際に流れの中から笹井と松窪がゴールを決めてリードを奪う。後半も個の力と組織力で圧倒し、50分には早間が3点目を奪取。83分にPKで1点を返されたものの、途中からピッチに入った松永のゴールでさらに突き放し、4-1で勝利して2連勝でノックアウトステージ進出を決めた。

グループステージ第2戦ではガーナに4-1で勝利してラウンド16進出を決める(写真は大山愛笑)



©2024 FIFA

ノックアウトステージ

接戦を制して決勝へ 3大会ぶりの栄冠ならず

ラウンド16は、グループDを2位で勝ち上がったナイジェリアと対戦した。日本は前半にやや硬さが見られたが、セカンドボールへの対応で先手を取り、徐々に流れをつかんでいく。33分にシヨートカウンターからのクロスに松永が合わせて先取すると、66分には笹井のクロスにフアースайдで土方が合わせて今大会5点目。終盤に1点を返されはしたが、2-1で勝利を収めた。

日本は大山と小山のダブルボランチを中心に中盤で主導権を握るが、最終局面で186cmの相手GKの好セーブ連発に苦戦する。しかし、GK大熊茜(一神戸)を中心とした組織的な守備でゴールに鍵をかけ、試合はスコアレスのまま延長戦に突入。集力を切らさず攻め続ける日本は102分、大山の直接FKを、3試合ぶりに先発出場した米田がバックヘッドで押し込み、これが決勝点に。2大会連続出場の大山は「前回大会の決勝で負けた相手に勝てたことは大きかった」と、スペインとの死闘を制したことがチームの自信につながったことを実感していた。

準決勝の対戦相手は、準々決勝で地元コロンビアをPK戦の末に下したオランダだ。標高約1000mに位置する都市カリアの会場で相まみえた。土方が「標高が下がり、さらに走れる感覚になった」と振り返ったように、環境の変化が日本を後押しする。スペイン戦と同じ先発メンバーで臨んだ日本は、スムーズなコンビネーションから決定機をつくる。55分、松永がドリブルで3人をかわしてクロスを入れ、松窪がこれをダイレクトで決めてリードを奪う。さらに83分、



準々決勝で韓国をPK戦の末に下したオランダとの準決勝。集中した守備と連携した攻撃から完封勝利を挙げた

シヨートカウンターから途中出場の早間がドリブルからチャンスをつくり、松窪の2点目を演出。最後は相手のパワープレーをしのごぎ、日本は3大会連続の決勝進出を決めた。

決勝は再びボゴタに戻り、アジア王者のDPR Koreaと対戦した。日本は左サイドの早間が5試合ぶりの先発出場となった。立ち上がりからDPR Koreaの球際の圧力と連動した攻守に押され、劣勢に回った日本。15分にはCHOE II Sonに左サイドを突破され、今大会初めてリー

ドを許す。狩野監督は流れを変えらるため、前半のうちに交代カードを切る。笹井、天野紗(ハンマルビーIF)、角田、林愛花(サンタクララ大)とフレッシュな選手を投入して反撃の糸口を探ったが、それでも最後まで1点が遠く敗戦。アジアカップ決勝のリベンジはならなかった。

2大会連続の準優勝という結果について土方は「決勝は技術もフィジカルも全てにおいて圧倒された。この悔しい気持ち忘れず、これからのサッカー人生に生かしていきたい」と、経験を糧にすることを誓った。

表彰式では、松窪がadidasシルバールボール、通算5得点の土方は同ブロンズブーツを受賞。チームは4大会連続6度目のフェアプレー賞に輝いた。狩野監督は今後の日本女子サッカーの育成年代の課題について「フィットネスレベルの追求」と「シンキングスピードの向上」、そして「その中で技術を発揮していくこと」を挙げ、なでしこジャパン(日本女子代表)を目指す選手たちへのエールとともに今大会を締めくくった。



adidasゴールデンボールはDPR KoreaのCHOE II Sonが受賞。日本の松窪はシルバールボールに輝いた

延長戦にもつれ込む激闘となった準々決勝のスペイン戦。米田の得点に喜ぶ選手たち



©2024 FIFA

1000mに位置する都市カリアの会場で相まみえた。土方が「標高が下がり、さらに走れる感覚になった」と振り返ったように、環境の変化が日本を後押しする。スペイン戦と同じ先発メンバーで臨んだ日本は、スムーズなコンビネーションから決定機をつくる。55分、松永がドリブルで3人をかわしてクロスを入れ、松窪がこれをダイレクトで決めてリードを奪う。さらに83分、

アジアカップの再現となったDPR Koreaとの決勝は苦戦。辛抱強く戦ったが牙城を崩せなかった



アジアカップの再現となったDPR Koreaとの決勝は苦戦。辛抱強く戦ったが牙城を崩せなかった

日本の試合結果

<グループステージ>
第1戦 7-0(4-0) ニュージーランド
 得点: 土方麻椰(2得点)、笹井一愛(2得点)、大山愛笑、小山史乃観、早間美空
第2戦 4-1(2-0) ガーナ
 得点: 笹井一愛、松窪真心、早間美空、松永未夢
第3戦 2-0(1-0) オーストリア
 得点: 土方麻椰(2得点)

<ノックアウトステージ>
ラウンド16 2-1(1-0) ナイジェリア
 得点: 松永未夢、土方麻椰
準々決勝 1-0(0-0、0-0、1-0)延長 スペイン
 得点: 米田博美
準決勝 2-0(0-0) オランダ
 得点: 松窪真心(2得点)
決勝 0-1(0-1) 朝鮮民主主義人民共和国

※全試合結果は55ページに掲載